



文化財ニュース いわき

第 73 号

平成 26 年 5 月 24 日

(公財)いわき市教育文化事業団

福島県いわき市常磐藤原町手這50-1
(いわき市考古資料館内)

TEL 0246 (43) 0391

いわ で たてあと

磐出館跡の発掘調査

—市内初となる横口付木炭窯の調査—

【現地説明会 平成26年5月25日(日) 10時~12時】

磐出館跡は、いわき市久之浜町久之浜字館ノ山地内に所在し、大久川左岸の太平洋を見下ろす台地上に立地する中世の城館跡として周知されていました。今回の発掘調査は、平成25年10月におこなわれた試掘調査によって木炭窯や土坑、土師器や須恵器などの古代の遺構、遺物がみつかったことにより、4月中旬から進められています。

発掘調査の結果、標高15~22mの丘陵の中腹に奈良・平安時代の木炭窯6基が上下2段にまとまって発見されました。いずれも地面をトンネル状に掘り込んでつくられた「地下式」の木炭窯で、窯の脇には木炭の掻き出し口(横口)が5~7個もうけられています。

これは「横口付木炭窯」と呼ばれるタイプで、いわき市内では初めての発見となり、6基まとまって検出される例も非常にめずらしく、大変重要な発見となりました。この窯によって生産された木炭は、須恵器や鉄をつくるための燃料として使われたものと考えられます。



背後に久之浜漁港を臨む磐出館跡



1号木炭窯全景



横口の底面には細い排水溝が掘られていました



作業場から外側に延びる排水溝

1号木炭窯

調査区の上段には3基の木炭窯が東西方向に1列に並んでみつけられました。そのもっとも西に位置するのがこの1号木炭窯です。

窯本体の規模は長さ約12m、底面幅は約1mを測り、脇には5つの横口がつくられています。窯の内側は真っ赤に焼けていたり、黒く炭化していて、繰返し木炭が生産されていたと考えられます。窯の外には作業場がもうけられ、そこから2条の溝が掘られています。この作業場から外に延びる溝は、2・3・5号木炭窯からもみつかっており、排水などを目的につくられたものであると想定されます。

窯が使用された時期は、おおよそ7世紀後半～8世紀後半と考えられます。

とじておきましょう。



4号木炭窯の横口を掘り進めています

4号木炭窯

調査区下段のもっとも南東側に位置しています。窯本体の規模は長さ約11m、底面幅約1.2mを測ります。横口はみつかった窯の中で最も多く7個つくられています。また、4・5号木炭窯の壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、横断面はカマボコ状の形をしていて、1～3号木炭窯とは異なった形態を呈しています。

遺物は作業場の覆土上層から須恵器の杯つぎが出土しました。その特徴から土器の年代はおおよそ8世紀の終わりごろに位置づけられます。

この杯は、その出土状態から窯が使われなくなってから廃棄されたものとみられ、8世紀の終わりにはすでにこの窯で木炭を焼くことはなかったと考えられます。



作業場から見た横口



作業場から出土した須恵器の杯

とじておきましょう。



2号木炭窯を測量しています



3号木炭窯全景



5号木炭窯を掘削しています



窯の断面形態（5号木炭窯）

まとめ

今回の発掘調査で発見された6基の木炭窯は、1～3号木炭窯が丘陵の等高線に対して平行に、4号木炭窯は唯一直交し、5・6号木炭窯は、等高線に対してやや斜めにつくられていました。横口付木炭窯は丘陵の等高線に対して平行につくられるのが一般的であるため、等高線に対して直交するようにつくられる4号木炭窯のつくりは特に珍しいといえます。

いずれの窯も本体の脇に5～7個の横口をもち、薪をくべる焚口^{たきぐち}は窯の長軸端部にもうけ、煙を逃がす煙出しはその反対側につくられています。1・2号木炭窯では焚口付近より焼けた板石が数個みつかっており、焚口はこの石によってふさがれていたものと考えられます。

これら木炭窯の周辺には、木炭を燃料とする須恵器の窯や製鉄炉などがつくられることが多いのですが、今回の調査区域内ではみつかっていません。しかし、木炭窯が6基集中して発見されたことは、当遺跡で盛んに木炭が生産されていたことを示しています。原料の木材や丘陵の傾斜・土質・風向きなどといった、木炭を大量に生産するために必要不可欠な要素がすべて整っていた場所であったことがわかります。

生産された木炭は、本遺跡が大久川を臨む台地上に位置するという立地をいかして、陸上交通のみならず、海上交通も使用して、周辺の消費地へと運ばれていったものと考えられます。

とじておきましょう。